

英語コーパス学会第17回大会

日時 2001年4月21日(土)
会場 帝塚山大学短期大学部(〒631-8585 奈良市学園南3丁目1の3 TEL 0742-41-4716)
(近鉄奈良線学園前駅下車南出口徒歩5分・詳細は <http://www.tandai.tezukayama-u.ac.jp/> 参照)

ワークショップ	10:00 - 12:00
《初めてのコーパス検索: WordSmith Version 3 を使って》	
講師	徳島大学 井上 永幸
先着 30名(予定)	参加費 会員無料・非会員 1,000円 (申し込みは電子メール・郵便で事務局まで)

受付開始 12:30

開会 13:00

1. 会長挨拶
2. 会場校挨拶 帝塚山大学短期大学部部長 小林 美和
3. 総会
4. その他

研究発表 13:30 - 15:00

司会 中央大学 新井 洋一 大阪大学 田畑 智司

1. ホワイトハウスの記者会見に見られる語彙の特徴 - 高校の現場からの視点で - 筑波大学大学院 竹内 典彦
2. 視点再帰代名詞構文の意味 - 談話、連語、言語使用域からのアプローチ - 椋山女学園大学 深谷 輝彦
3. The LOB clones: can we accurately compare corpora? 大東文化大学 Robert Sigley

休憩 15:00 - 15:20

シンポジウム 15:15 - 17:15

日英パラレルコーパスでどのような英語研究が可能か?

司会 関西外国語大学 西村 公正

日英パラレルコーパスと検索プログラムの概要

講師 関西外国語大学 西村 公正

講師 赤瀬川翻訳事務所 赤瀬川史朗

研究事例 1: 「顔」を含む表現はどのように英訳されているか?

講師 関西外国語大学 岡田 啓

研究事例 2: 「とき」と“WHEN”

講師 関西外国語大学大学院 田中美和子

研究事例 3: 英語教育における日英パラレルコーパスの利用

講師 岡山県立岡山朝日高校 鷹家 秀史

閉会の辞 帝塚山大学 和田 弘名

《懇親会 17:45 - 19:30 会費 4,000円》

司会 帝塚山大学 梅咲 敦子

英語コーパス学会 (Japan Association for English Corpus Studies)
会長 齊藤俊雄 事務局 770-8502 徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部 中村純作研究室
TEL: 088-656-7129 E-mail: jun@ias.tokushima-u.ac.jp 郵便振替口座 00940-5-250586
URL <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECs/index.html>

大会当日、入会受付もいたしますので、お誘い合わせの上ご参加下さい(年会費 一般 5,000円 学生 4,000円)。
また「当日会員」としての参加も受け付けております(1,000円)。

英語コーパス学会第17回大会レジュメ

ワークショップ《初めてのコーパス検索：WordSmith Tools Version 3.0 を使って》

(講師 井上 永幸)

コーパス言語学において 21 世紀最初の大ニュースは BNC World Edition (CD-ROM/Online) の公開であろう。これで、現代イギリス英語を対象とした研究はかなり環境が整ってきたと言える。ただ、やはり個人の研究目的や研究対象によっては、配布されたり独自に集めたテキストファイルのデータを分析対象とせざるを得ない場面が多いことも事実である。そういった状況で欠かせないのがコンコーダンスソフトである。

本ワークショップでは、代表的なコンコーダンスソフトのひとつである WordSmith Tools Version 3.0 (以下、WordSmith) を使って、コンピュータの操作はある程度できるが、コンコーダンスソフトやコーパスで何ができるのか知りたいという方を対象に、WordSmith のダウンロードからフリーのテキストを使っての基本的な使い方までを、下記のような手順で時間をかけてじっくりと紹介してゆく。

1. WordSmith のダウンロード
2. フリーのテキストのダウンロード
3. WordSmith のインストール
4. フリーのテキストの準備
(休憩)
5. Concord の操作紹介
6. WordList の操作紹介

なお、参加希望の方には、前もって Windows98 のファイル操作〔ファイルのコピーやフォルダの作成等〕に関して、若干の復習をしておいていただければ幸いです。

研究発表

ホワイトハウスの記者会見に見られる語彙の特徴 高校の現場からの視点で

(竹内 典彦)

本発表の目的は、現代のアメリカの政治の舞台で交わされる会話を、コーパス的に分析し、その語彙や文体の特徴を明らかにする事にある。また、日本の中学や高校の英語教育の中で常識として指導されているようなこ

とが、はたして実際にその通りなのかを、いくつかの例を基に検証していきたい。つまり、日本の各種参考書や文法書で述べられていることと、今回見ていく、「アメリカの政治の舞台で交わされる会話コーパス」との比較を通して、統計的なデータを基に、ということが立証できるかを見ていきたい。

ここで用いられるコーパス (The Corpus of Spoken Professional American-English のこと、以下 CSPAE) は、1994 年から 1997 年にかけての、ホワイトハウスでの記者会見の模様を含むものである。主要な部分は、質疑応答である。また、ここに登場する人物は、政府高官、ジャーナリストである。CSPAE には、200 万語以上の資料が含まれていて、コミュニケーションのサンプルとして、非常に優れたものといえる。実際の場面でアメリカ英語がどのように用いられているかを示す貴重な資料である。また、誰が実際にその発話をしたかも明らかにされている。

本発表では、おもに語彙の使用を頻度と用法で分析していく。そして日本の中学・高校の英語教育の中で、当然のように指導されていることが、実際はどうであるのかを見ていく。たとえば、高校では *sometimes = once in a while = occasionally* といった提示の仕方が、参考書等ではなされることがあるが、CSPAE での頻度は、圧倒的に *sometimes* が多く、ついで、*occasionally*、そして *once in a while* の順になる。また、*decide = make up one's mind* という提示のされ方もされるが、CSPAE では、*make up one's mind* はほとんど現れない。*for example = for instance* という置き換えもよく言われるが、*for instance* の使用は、割合としてかなり少ない。*agree* に続く前置詞は「人」の場合が *with* で、「物事」の場合は *to* であるとされるが、CSPAE によるとそうは言い切れない。

本発表では、統計上の有意差が明らかになるように、比較的出現数の多い単語や語句を中心に議論していく。こうした統計処理については、SPSS を利用していく。結果を基に表やグラフを作成し、なるべくわかりやすい発表をする予定でいる。

視点再帰代名詞構文の意味 談話、連語、言語使用 域からのアプローチ

(深谷 輝彦)

Barlow (1996) が指摘するように、再帰代名詞と最も高頻度で共起する動詞は cut/defend/kill のような単純他動詞ではなく、視点再帰代名詞構文をとる find/see/consider である。本発表では、Bank of English コーパスを利用しながら、視点再帰代名詞構文 (find + oneself + predicate) について談話、連語、言語使用域という3つの視点からアプローチする。

本研究の出発点は、この構文をめぐる英語学習者向け英英辞典の記述である。例えば、COBUILD² (1995) は次の定義を与える。"If you find yourself doing something, you are doing it without deciding or intending to do it." 注目すべきは without 以下の部分である。この意味を、LDOCE³ (1995) は "although you had not intended or planned to do it" と言い換える。そして視点再帰代名詞構文の最も明解な定義を与えてくれるのが OALD⁶ (2000) である。IN UNEXPECTED SITUATIONS という short cut の後に、"to discover sb/sth/yourself doing sth or in a particular situation, especially when this is unexpected." とある。当該構文が生み出す「意外性 (unexpectedness)」は、どのように生じ、どのようにコーパスに実現されるのか、という問いに対する一つの答えをめざしたい。

先行研究を概観した後、視点再帰代名詞構文が談話上で後景、前景のどちらの役割を果たすのかをコーパス資料から検討する。従来の後景論を見直す必要性を指摘する。次にこの構文と共起する表現(コロケーション)をコーパスから発見し、それらがこの構文の意味をどのように支えているのか、考察する。最後に、Barlow (1996) がすでに指摘しているように、find + oneself + predicate は小説で非常に好まれ、会話ではめったに出でこない。このような言語使用域による頻度の違いがなぜ生じるのか議論するつもりである。

視点再帰代名詞構文という一構文の背後に、非常に豊かな英語の世界が開けている点を例証することができれば、本発表の目的は達せられる。

The LOB clones: can we accurately compare corpora?

(Robert Sigley)

The Brown and LOB million-word corpora of 1961 standard written American and British English have provided a model for further corpus construction, resulting in -- amongst others -- the Wellington Corpus of 1986 New Zealand English, and the more direct updates compiled at the

University of Freiburg (the Frown and FLOB corpora, using texts published between 1990-92). Because these 5 corpora all have the same text type composition, they are a valuable resource for comparisons of standard national varieties (U.S. / U.K. / N.Z.), and for study of ongoing change over time (between 1961 and 1986-1991). However, such studies must assume that the data is stylistically comparable -- i.e., that the same text categories in different corpora do roughly the same things, with roughly the same social evaluation.

The present paper tests that assumption, by comparing the 5 written corpora on a general 'formality' index (derived from principal component analysis of high-frequency wordform sets). Index scores are calculated for each text in each of the corpora, resulting in a stylistic profile showing the extent to which corpora, individual text categories, and individual subcategories, are similar enough to allow meaningful comparison. My findings suggest that overall comparisons are, in general, justified; but some significant category-specific formality differences are also identified, which should be taken into account when interpreting observed linguistic differences between corpora.

シンポジウム

《日英パラレルコーパスでどのような英語研究が可能か?》

(司会 西村公正)

日本語の表現を、英語母語話者は英語でどう表現するかという視点から英語の研究をするために、日英パラレルコーパスを作成した。英語の翻訳が多数ある日本文学を選んだ。小説を日本語コーパスとし、その英訳を英語コーパスとするパラレルコーパスである(「関西外大コーパスB」と称する)。この日英パラレルコーパスは、作品数44作品(短編を含む)、英語テキストの語数は約231万語の規模である(作品名は別表を参照)。

日英パラレルコーパスが可能にする英語研究は幅が広がると思う。このシンポジウムでは、コーパスの概要と作成した検索プログラムの紹介のあと「日・英の表現の対照的研究」、「日英パラレルコーパスの援用による英語語法研究」、「日英パラレルコーパスの英語教育への利用」の3点の研究事例を発表したい。

「日英パラレルコーパスと検索プログラムの概要」

(西村公正・赤瀬川史朗)

この日英パラレルコーパス「関西外大コーパスB」は、日本語コーパスに日本文学の作品を選んだ。これは、日本語のOCRでのコーパス作成作業が膨大な時間を要するので、『新潮文庫の100冊CD-ROM版』など、手に入りやすい日本語のテキストファイルを利用したためである。なお最近の日本語作品も欲しいので赤川次郎、林真理子、片岡義男などの6作品は自らOCR作業で作成した。

OCRによる日本語コーパスの作成、および英語テキストとの対応箇所のパラレル化作業の内容を明らかにして、これから日英パラレルコーパスを構築しようとする研究者の参考資料としたい。日本語の英語翻訳における問題にも触れる予定である。

「関西外大コーパスB」の概要を紹介したあとで、検索プログラムを紹介する。日・英それぞれのファイルをパラレル化したデータファイルはxmlファイルに加工するが、そのエディターが付いており、パラレル化したコーパスファイルさえあれば、簡単に利用できるものである。xmlファイル化から検索、出力までをパソコンからスクリーンで紹介したい。

研究事例1「『顔』を含む表現はどのように英訳されているか？」(岡田 啓)

日本の小説の英訳で「顔」を含む表現がどのようにに翻訳されているのかを調査した。「顔」は必ずしもfaceと訳されるわけではない。日本語での「顔」で表現可能な領域は英語では“head,” “eyes,” “cheeks,”などと文脈に応じてさまざまに翻訳される。また「顔」を含むフレーズが必ずしも特定の名詞に対応しないことも多い。「彼は顔をあげた」が“He looked up.”となったり「顔が火照った」が“I flushed hot.”のように英語では動詞として表現されたり、「キョトンとした顔で」が“(looked at me) blankly,” 「改まった顔で」が“with an air of importance”のように副詞句として訳出されるときもある。

また日本語で「顔を見る」となっている場合であっても“look at someone's face”となると、単に“look at someone”のように「顔」の部分を省略するときがある。

また前後の文脈のなかで、状況を意識することによって、英文の訳者が「顔」を含む表現をまったく

訳出しない場合もある。

この他、「顔が広い」「顔が立つ」などの慣用表現も、「顔」を直訳するわけにはいかない。文脈の中で適切な英語が選ばれている。

この発表では、「顔」を含む表現が、英語においてどのような名詞、動詞などに訳されているのかを調査することによって、日英表現の特徴と相違について言及する。

研究事例2「『とき』と“When”」(田中 美和子)

時を表すwhen節は、文法的には従属節として位置づけられるが、意味機能的には主節の振る舞いをする現象がある。

(1) There was the maid of Nagara with her long billowing sleeves, riding a white horse through a mountain-pass, when out leapt the two men Sasada and Sasabe, and each tried to drag her off. (「草枕」)

例文(1)においては、when節の中で、本来主節でしか起こらないとされる副詞の前置と主語・動詞の倒置が見られ、さらに、主節よりもwhen節のほうがより重要な情報を担っていると思われる(Jespersen (1949: 355), Quirk, et al. (1985: 1084)を参照)。その意味で、主節の事象はむしろ背景(地)で、when節の事象は前景(図)であると捉えることができよう。このようなwhen構文は、Green (1974)で“Main Clause Phenomena,”巻下(1979)、坪本(1998)等では「主従の逆転」また「『語り』のwhen節」と言われているものである。

このようなwhenの用法については、現在のところ、英和辞書や文法書では「接続詞」として分類してあるものもあれば、また「関係副詞」として分類してあるものもあり、定説は存在しないようである。本発表では、まず、このwhenの用法がどのように記述されているかを概観する。そして日英パラレルコーパスを用いて、日本語のどのような表現がこのwhen構文で訳出されているのかを見る。最後に、このようなwhen構文について、なぜ「主従の逆転」が起こるのか、またその場合の動詞の意味やアスペクトにどのような特徴が見られるのかを先行研究を踏まえて分析したい。

研究事例3「英語教育における日英パラレルコーパスの利用」(鷹家 秀史)

英語コーパスを利用した英語教育に関して、すでにWichmann, et al. (1997), Kennedy (1998)などでいわゆる

Data-driven Learning が紹介されているが、日本の高校の現状を考えると必ずしも現実的な方法ではない。本発表では主として英作文指導において効果的と考えられる、日本語表現と英語表現の発想の違いを理解させる取り組み（日本語 英語）を紹介したい。

（例）

- * 名詞的 vs. 動詞的：「歌がうまい」「足が速い」...
- * 無生物主語 vs. 副詞句：「～を見て驚いた」「どうして...?」...
- * 肯定表現 vs. 否定表現：「ではないと思う」「眠れない」「ご遠慮なく」...
- * 擬態語：「とぼとぼ」「くすくす」「じろじろ」...

別表「関西外大コーパスB」採録の作品

赤川次郎「駐車場から愛をこめて」,「我が愛しの洋服ダンス」,「幸福な人生」,「見知らぬ関係」,「危険な書名」,「真夜中のための組曲」『真夜中のための組曲』所収 角川書店, 1981.	Akagawa, Jiro. "The Car Park," "The Wardrobe," "The New Man," "If I Were You," "A Dangerous Petition," and "Midnight Suite," in <i>Midnight Suite</i> . Trans. Gavin Frew. Tokyo: Kodansha International, 1984.
芥川龍之介「河童」『改造』三月号, 1927.	Akutagawa, Ryunosuke. <i>Kappa</i> . Trans. Geoffrey Bownas. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1971.
芥川龍之介「鼻」『羅生門』所収 1917.	Akutagawa, Ryunosuke. "The Nose," in <i>The Spider's Thread and Other Stories</i> . Trans. Dorothy Britton. Tokyo: Kodansha International, 1987.
芥川龍之介「芋粥」『羅生門』所収 1917.	Akutagawa, Ryunosuke. "Yam Gruel," in <i>Rashomon and Other Stories</i> . Trans. Takashi Kojima. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1952.
芥川龍之介「羅生門」『羅生門』所収 1917.	Akutagawa, Ryunosuke. "Rashomon," in <i>Rashomon and Other Stories</i> . Trans. Takashi Kojima. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1952.
有吉佐和子『華岡青舟の妻』新潮社 1967.	Ariyoshi, Sawako. <i>The Doctor's Wife</i> . Trans. Wakako Hironaka and Ann Siller Kostant. Tokyo: Kodansha International, 1978.
太宰治『津軽』小山書店, 1944.	Dazai, Osamu. <i>Return to Tsugaru</i> . Trans. James Westerhoven. Tokyo: Kodansha International, 1985.
太宰治『人間失格』筑摩書房, 1948.	Dazai, Osamu. <i>No Longer Human</i> . Trans. Donald Keene. New York: New Directions Books. 1958.
遠藤周作『沈黙』新潮社, 1966.	Endo, Shusaku. <i>Silence</i> . Kodansha edition. Trans. William Johnson. Tokyo: Kodansha International, 1982.
林真理子『葡萄が目にしみる』角川書店, 1984.	Hayashi, Mariko. <i>The Green, Green Grapes of Home</i> . Trans. Sonya Johnson. Tokyo: Kodansha International, 1986.
井伏鱒二『黒い雨』新潮社, 1966.	Ibuse, Masuji. <i>Black Rain</i> . Trans. John Bester. Tokyo: Kodansha International, 1966.
片岡義男「一日中空を見ていた」,「タイトル・バック」『一日中空を見ていた』所収 角川文庫, 1984.	Kataoka, Yoshio. "Help me See the Sky," "Title Sequence," in <i>Help me See the Sky</i> . Trans. Ralph McCarthy. Tokyo: Kodansha International, 1986.
川端康成『雪国』創元社, 1937.	Kawabata, Yasunari. <i>Snow Country</i> . Trans. Edward G. Seidensticker. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1957.
黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社, 1981.	Kuroyanagi, Tetsuko. <i>The Little Girl at the Window</i> . Trans. Dorothy Britton. Tokyo: Kodansha International, 1984.
以下省略（当日の資料を参照下さい。なお、上記リスト中、1945年以前の作品の出版社名は一部省略しております。）	